The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	メルロ・ポンティと子どもの現象学 ： 『知覚の現象学』における人生の最初の数年間
Author(s)	正置, 友子
Citation	臨床哲学. 2016, 18, p. 101-119
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/60598
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

メルロ・ポンティと子どもの現象学
――『知覚の現象学』における人生の最初の数年間

正置　友子

はじめに
―「私とは絶対的な源泉である」[1]

子どもとおとなの絶対的な唯一の違いは、子どもはおとなであったことはないが、おとなは子どもであったことがあるということである。では、おとなは自分が子どもであった時のことを記憶しているかとなると、ほとんどの人は記憶に留めてはいない[2]。

哲学者と言われる人たちは、一般的に子どもには注意を払わない。自分が子どもであったころのことを覚えていないだろうし、自分が子どもであったことさえも記憶にないかもしれない。

メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』に衝撃的に出会ったのは、序文にある「私とは絶対的な源泉である」という一文であった。この文章を読んだとき、この「私」は、そのとき『知覚の現象学』を読んでいる 70 代の「私」であると同時に、私が絵本を一緒に読んできたたくさんの子どもたち（幼児期前期と称される 0 歳から 3 歳半くらい）のひとりひとりのことでもあった。この時期の子どもたちは､「私とは絶対的な源泉である」を日々体験している。意識的ではないだけに、一層、世界との素朴な接触を新鮮に行っていた。幼い子どもたちの生きている姿を見て、「世界とのあの素朴な接触を取り戻す」[3] ことを教えられ、現象学へと導かれたのは私であった。

メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』には、子どもがよく登場する[4]。日本語の訳書の場合、子ども（たち）、幼児、幼児期、幼年期、幼年時代、幼少時、嬰児など、「子ども」の呼称もさまざまに使い分けられている。原書のフランス語版では ‘enfant’ で、英語の翻訳書では ‘child’ で統一されている。このことから､日本の社会では､子どもである時期を､あかちゃん、乳児期、幼児期、子ども期（学齢期）のように、子どもの年齢によって、あるいは子どもが所属する制度によって、子どもを捉える傾向が強いことがうかがえる。

メルロ＝ポンティ自身が､「子ども」と書いたときに、何歳ころの子どもを想定してい

たかは具体的には書かれていないが、その文脈、内容から推察して、あるいは『知覚の現象学』全体から想定して、日本語の訳者が「幼児」とか「幼児期」へと訳したことは、子ども期の年齢層を限定しているようではあるが、日本の読者にとっては適切であると思う。

私が、本稿のなかで登場させている子どもたちは、幼児期の、それも幼児期前半の子どもたちである。0 歳から 3 歳半くらいの子どもたちが物事を体得していく過程、すなわち世界を捉えていく過程は、『知覚の現象学』のなかで、メルロ＝ポンティが描き出している子どもたちの姿と重なる。幼児期前期と幼児期後期の子どもたちとでは、他者（物であれ人であれ）との関係の取り方が異なる。幼い子どもたちと長年絵本をシェアしてきた経験から言えば、3 歳半のあたりで分水嶺のような山脈があり、この山脈を超えて、幼児期後半へ、さらに学齢期の子ども時代へと入って行く。その意味では、幼児期前期の子どもたちの有り様は、その後の生き方に影響を与える大事な人生の始まりの時期と言える。すなわち、人の最初期の段階で、この山脈を超える必要があるのではないか。この時期は、人は立ち、歩き、言葉を獲得し、他者と言葉を介在として関係性を持つようになる。

メルロ＝ポンティと言えば、『知覚の現象学』の原書 *Phénomenologie de la Perception* を 1945 年に出版して数年後、1949 年にソルボンヌ大学で、児童心理学および教育学の講座の主任教授となり、1949 年から 1952 年まで児童心理学の講義をしている。その中には、「意識と言語の獲得」（1949 年―1050 年の講義）や「幼児の対人関係」（1950 年―1951 の講義）も含まれている。こうした講義録には、当然のことながら、子どものことが中心となり、子どもたちの言葉の獲得についての考察が意識的に深められていく。それに対して、『知覚の現象学』では、著者の根本的なテーマである「人間とは何か」を深めたいという意識のなかで子どもが捉えられている。もちろん、この態度は、「意識と言語の獲得」でも「幼児の対人関係」の中でも流れてはいるが、『知覚の現象学』に比して、問題意識が「子どもはどのようにして言語を獲得していくか」に特化している。

『知覚の現象学』は、人間とはなにか、を問う哲学の書であり、その人間の根本のところに、人生の初めの時期、すなわち子ども期（幼児期前半）を置いている。

私が、本稿で考えたいのは、子どもそのものではない。人間の最初の段階の子どもであると共に、その子どもが、その人の中で命尽きるときまで生き続ける子どものことである。そのため、今回は、『知覚の現象学』を中心に、幼児期の子どもの現象学を考えてみる。

紙幅の関係で、『知覚の現象学』で考察されている「子どもの現象学」に関するすべてのテーマを、例えば身体、言葉、知覚、前人称性、間主体性などを、丁寧に取り上げるこ

とは不可能である。今回は、メルロ＝ポンティの言葉を借りれば、彼が『知覚の現象学』の中で幼児期の子どもについて書いたことの粗描に過ぎないかもしれない。しかし、これまで、子どもに焦点を絞って、『知覚の現象学』が繙かれたことはなかったかもしれない。『知覚の現象学』は、人の最初期についての書でもある。

第一章　出生
―「身体的実存は、世界との最初の契約を設立した」[5]

1. 子どもが生まれた家では

> 子どもが生まれた家では、あらゆる物がその意味を変え、その子から、まだ決定されていないあらたな取り扱いを受けるのを待つようになる。誰か別の、もうひとりの人間がそこに来たわけであり、短いか長いかはわからないがひとつの新しい歴史がうち立てられたばかりであり、ひとつの新しい登録簿が開かれたわけである。[6]

メルロ＝ポンティの文章は、時には非常に硬質であり、時には入り口から入ったものの出口を見つけるのが難しい迷路に入ったように難解であるが、時には、驚くほど優しくなり、その人を身近に感じる場合がある。引用文は、哲学者ではあるが父親でもあるひとりの人間の素顔を垣間見させてくれる。メルロ＝ポンティの学者としての履歴はわかっていても、個人史はほとんど知られていない。しかし、この引用文にあるように、子どもが生まれると、その家の中や家族の状況が微妙に変化し、家中が子ども中心の雰囲気になっていくことが、具体的にではないが、空気感が伝わるように書かれている。多分、メルロ＝ポンティの家にもあかちゃんが誕生したにちがいない。誕生してきた子どもはひとりの独立した人間であり、いよいよ、その子だけの真新しい登録簿が開かれることになる。そこには新しい「主体」であるひとりの人間が、その登録簿にどのような文章を書いて行くことになるのか[7]。

日本の場合は、生れる前からおくるみを準備し、あかちゃん用の蒲団、ベット、ベビーバギーなどを買い揃え、用意万端整えて、あかちゃんの誕生を待つ。新しい命が生れると、父母や祖母の呼び名まであかちゃんに合わせて変更される。お互いに個人名で呼び交わしていた若い夫婦が、突然に「おとうさん」と「おかあさん」になり、祖父母になった人た

ちは「おじいちゃん」と「おばあちゃん」になる。まさしく「あらたな取り扱い」を受けるようになるのだ[8]。

2.「私の誕生と死も、私にとっては思惟の対象ではありえない」[9]

『知覚の現象学』を読んで、最初非常に困惑し、考え、そしてこのことこそメルロ＝ポンティの現象学に関わることなのだと納得した文章が、「私の誕生と死も、私にとっては思惟の対象ではありえない」の一文であった。哲学とは、「人間とは何か」を根本的に考える学問であり、＜生れ・死ぬ＞人間とはどういうものであるかを教えてくれるものだと思い込んでいた。しかし、メルロ＝ポンティは、そんなことは思惟の対象ではないと、きっぱりと書いている。私の誕生も私の死も、私の意識の対象にはならないからだ。

では、生れてくるとはどういうことだろう。「私が生まれてきて、一個の身体と一個の自然的世界とをもっているかぎり、私はこの世界のうちに、私の行動と絡み合う他の行動を見いだすことができる。」[10] 生まれてくるということは、まずは一個のからだを持ち、一個の自然的世界を持っているということであり、だから、私という存在と関係を持つ他の存在とも出会うことになる。生れてくるということは、非常に単純で素朴なことだ。からだがあるということなのである。ところがこのからだは、私が自分で作ったものではない。ある日、突然に「私は世界に投げ込まれた」[11]。その瞬間から私の身体は世界に存在することになったのだ。身体を持つと言うことは、自然的世界を持つということと同じ内容である。

現代人は、意図や意思や心という抽象的な観念で生きていると思っているかもしれないが、基本的にはからだの要求に答えているのではないか。お腹がすけば食事を取るし、疲れれば休憩を取りたくなり、睡眠が必要になれば横になる。また、コーヒーのいい香りがしてくれば、喫茶店に入らずにはいられなくなる。腕にちくっと感じた途端に、もう一方の腕が動いて、手がパチンと蚊を叩いていることもある。悲劇的なおはなしを読んで泣く。理不尽な思いをさせられると、思わず頭に血が上る。すなわち生きていると言うことは、からだが生きていると言うことである。呼吸をし、見たり、聴いたり、触ったりして、からだが反応するのだ。こうしたことを自然的世界という。自然は、身体の外にある木や草ばかりではない。身体内にあるのも自然である[12]。

いったい、人間とは何なんだろう。

私とは、何であろうか。私はひとつの領野であり、ひとつの経験である。ある日のこと、決然と何ごとかが進行しはじめた。するともうそれは、眠っているあいだでさえも、見たり見なかったり、感じたり感じなかったり、悩んだり楽しくなったり、思考したり休息したりすることを、一言でいえば、世界と「胸襟をひらいて話し合いをつける」ことを、もはややめることはできなくなるのだ。[13]

生まれるということは、身体を持って、「ある日、決然と何ごとかが進行しはじめる」と言うことなのだ。そして、そのことが開始するやいなや、死が身体および自然的世界を終わらせてくれるまで、続くことになるのだ。

まとめれば、出生とは、身体的に実存することであり、世界との最初の契約を設立し、「登録簿」に記載された、と言うことである[14]。

第二章　私の誕生
―きっぱりと自己自身に手渡されてしまった存在者[15]

1.「私は私にあたえられている」[16]

出生と言うことは、世界に投げ込まれることであり、世界との最初の契約を設立したことになるとメルロ＝ポンティは言う。要するに、出生に関して言えば、私は「世界に投げ込まれた」のだから受動的である。ところが、「世界との最初の契約を設立する」という言い方は、二者が同意している印象を受ける。この文章の主語は「身体実存（存在）」であり、身体実存は、この場合、人のことではあるが、身体が存在するようになったと言うことで、身体の存在そのことが、世界との契約が設立した（生じた）と読むことができる。出生したばかりのあかちゃんが、ペンを手に持って契約のサインをすることはできないのだが、身体を持ったというそのこと自体が、「私は生まれました」と認めることになるのだ。

このように生まれてきてしまったもの、すなわち誕生したものについて、メルロ＝ポンティは一挙に自ら引き受けるものとしている。「これが生れてきた存在者、つまり了解されるべき何ものかとしてきっぱりと自己自身に手渡されてしまった存在者の運命なのである。」否応はない。一旦出生してしまったら（希望したわけでなくても）、私は生れたくは

ないのですなどと拒否することはできない。生れた以上、存在者となり、「わかりました、引き受けます」と受諾するしか選択はない。「私は私にあたえられた」のだから、自分のものとして、受け取るしかない。

青山台文庫[17]で幼い子どもたちと絵本をシェアする活動である「だっこでえほんの会」[18]を10数年行ってきた。幼児期前半と言われる0歳から3歳台の子どもたちが文庫にやってくる。この子どもたちの振る舞いを見ていると、決然と、喜んで世界との最初の契約を交わし、自分の存在を自分で引き受けたことがわかる。生れた途端から、みんな生きているのだ。生きようとしているのだ。元気に生まれてきた子も、障がいをもって生まれてきた子も、健康な時も、病気の時も、どの子も自分のすべてを懸けて生きている。どの子もその子なりにぴかぴかに輝いているのだ。からだを持って生まれてくるということは、生きるために生まれてきたとしか言いようはない。

幼い子どもたちは、いっぱい見る。いっぱい聴く。いっぱい触る。いっぱい食べる。いっぱい感じる。そしていっぱいからだを動かす。要するに、子どもたちは感覚（知覚）の機能を全開させている。おとなの中には、自分の方が長年生きてきて、経験も豊富だから、物事を良く感じることができると思い込んでいる人もいる[19]。

私は、青山台文庫を40年以上主宰し、子どもたちと絵本を読んできたが、子どもたちが往々にしておとなよりも深く感じ、良く読み取っていることに気づいてきた。とりわけ幼児期の子どもたちが絵本と出会うその強度と深度は、内容にもよるが、おとなの比ではない[20]。この時期の子どもたちがどのように絵本を受取るかを考えるのに最適の絵本が『もこ　もこもこ』（谷川俊太郎文　元永定正絵）である。

2. 子どもたちと『もこ　もこもこ』を読む

『もこ　もこもこ』が世にでたとき、おとな達から、ブーイングが起こり、「これは絵本ではない」と拒絶された。それは、絵本とはどういう物であるかということへの思い込み、すなわち、絵本は、或るテーマやメッセージを伝えるものである、絵本は、幼児が楽しむものである（『もこ　もこもこ』は子どもにはわかるはずはないとおとなは思った）、絵本は、もっと言葉が多く、言葉で物語を語るものであるなど、おとな側の、絵本に貼りつけたラベルがあった。『もこ　もこもこ』は、絵本のなかでも大型に属する。縦28.5㎝×横22.5㎝あり、開くと、左右2ページの見開きは、横45㎝にもなり、絵は迫力がある。

ところが、その大画面の中で、言葉は「しーん」の一語が右上に小さく書かれているに過ぎない。どのページを捲っても、「もこ」や「ぷうっ」など、ほとんどが短い一語。おとなにとっては、文字（言葉）の少ない絵本は、読むに堪えないものであった。

ここで、非常にパラドクシカルなことが起った。この絵本を自分たちの物として大喜びで受け取ったのは、幼児たちであった。おとなにはわからなかったが、この絵本のテーマや意味を完璧にわかり、その絵本のなかに物語を読み込んだのも幼児であった。

絵本『もこ　もこもこ』は、生命誕生の瞬間、および生命の生成を表現したものである。誕生して間もない幼い子どもたちは、最初のページの、透明感のある青一色の世界に、自分たちがそこで浮遊し、いまや後にしてきた透明な世界に一瞬のうちに戻ったのではないか。あかちゃんは、おかあさんのお腹のなかで、耳は聞こえていたけれども、まだ見えてはいないので、色には気づいていなかっただろうが、からだ全体の共感覚で感じていたのは、こんな青だったかもしれない。この絵本の青を見たときに、あ、あそこだ、と感じ取ったかもしれない。眼で色を見ていなくても、からだ全体で色を感じ取ることはできる。人が赤を見たときに「赤」より先にからだで「暖かい」と感じるように、あるところで感じていた色が、あるところで或る色を見たときに、あそこの色はこれだったと直観でわかるように。

幼い子どもたちが、なぜ『もこ　もこもこ』の世界に住むことができるのか。それは、彼らは、言葉で分節化する前の世界を享受することができるからである。画家である元永定正は、言葉で表現しているわけではない。言葉以前のもっと素朴で、もっと根源的な生命を色と形で表しており、幼い子どもたちは、画家が表現している世界にすっかり共感し、『もこ　もこもこ』をみるだけで、一人でにからだが動き、蹲り、大きく伸びあがり、飛びあがり、膨らみ、破裂し、宇宙を漂うのだ。すなわち自然的世界をたっぷりと生きているのだ。

第三章　色の獲得

―「私は身体を通してはじめて世界へいたるのだということを、忘れるわけにはいかない」[21]

1. 色の出現は、一つの「創造」である[22]

人は身体を通してはじめて世界へいたる。見る、聴く、触る、嗅ぐ、味わうなどの感覚を通して（共感覚として組み合わさっていることも多いが）、子どもたちは世界を掴んでいく。この章では、絵本とも関係が深い「色」を通して、幼い子どもたちが世界をどのように把握していくかを考えてみる。

子どもたちが何回となく見ている絵本がある。色がついているのだが、見ていても色に気がつかない。この点について、メルロ＝ポンティは、「心理学者は、子どもたちは色の名称を知らないか、色を混同しているから、色彩を区別できないのだと言っているが、問題はそういうことではない」[23]、と言っている。子どもたちが色に気づくのは、その前に、名称を知らなくても、暖かい色合いだとか冷たい色合いだとかは感じ、なんらかの分節化を行っている。それがある日、ある色に「注意をする」ということが起こる。

> 注意をするということは、単に前から存在している所与により多くの照明を与えるということではない。それはその所与を図として浮び上がらせることによって、そのなかに一つの新しい分節化を実現することだ。その所与は、いままでは単に地平としてそこにあったのだが、いまや全体的世界のなかで、新たな領域を真に形成するようになるのである。[24]

今までもそこに（地平に）在ったのだが、気づかないでいる。それがあるときに注意して見ると、世界全体が今までとは違って見えてくるようになる。こういうことはよくあることである。いつも歩いている道だから、周りは見えていても見ていない。或る時、周り（地平）から何かが浮び上る（図になる）。すると、その浮び上ったものだけが輝くのではなく、全体の構図が違って見えてくる。

子どもたちは、同じ絵本をなんども「読んで」と持ってくる。おとなは一度読んだら「わかった」と思うから、うんざりする。ところが子どもの方は、何度でも読んで欲しがる。

同じ絵（地平）なのだが、見るたびに発見があるのではないだろうか。メルロ＝ポンティも、注意の対象が出現することを「一つの創造」と読んでいる。

2.『いないいないばあ』をなんかいも読んで

「だっこでえほんの会」では、毎回、最初に、絵本『いないいないばあ』（松谷みよ子文　瀬川康男絵）を読む。あかちゃんたちは、一年間に私から 17 回ほど読んでもらうが、家庭でも両親から読んでもらうだろうから、一年間には数十回読んでもらっていることになる。「色」への注意が起こり、「色」が出現するのは、1 歳半の後くらいだろう。

ある日の 1 歳組の絵本の会の時、私は『いないいないばあ』を絵本バッグから取り出した。「では、『いないいないばあ』を読みます。」そして、「にゃあにゃあがほらね、いないない……」、めくって「ばあ」と、ねこ、くま、ねずみと読んでいく。そして、「こんこんぎつねも、いないいない……」とページをめくると、誰かが、ひとさし指を突き立てて、私が右手に掲げている絵本のところに向かってやってきて、きつねの耳に指をつけると「あ」と言った。「赤」の「あ」のことらしい。

『いないいないばあ』の絵は瀬川康男の子どもに媚びることのない芸術的な絵である。絵本の中の「赤」なら、他にももっとわかりやすい「赤」がたくさんある。よりによって、毎年、「色」への注意が最初に起こるのは、この地味な、きつねの耳の中の「赤」なのである。その赤は小さな炎の形をしていて、絵がリトグラフで制作されているので、少しかすれたように塗られている。子どもたちは、「赤」と命名する前に、きつねの耳の中の「赤」の一種の妖しさに気づいていたのではないか。そして、この絵本の登場人物の中で、ただ一人女性であるらしいきつねになんとなく自分の母親を重ねているのではないか。

きつねの耳の「赤」に始まって、子どもたちは色の命名を続ける。最初は「あ（赤）」、「ち・き（黄）」から始まって、青や黒に進む。そして、自分の服や友だちの服のなかに、「おんなじ」色を見つけるようになる。さかんに、絵本のなかの色や物と、自分の服の中の色や物に同じものをみつけ、交互に両方を指さして、「おんなじ、おんなじ」（言葉には出さないが）をうれしそうに連発するようになる。

第四章　言葉の獲得

―言葉をつうじての他者の思想の獲得、他者への反省、他者に従って思惟する能力、というものがあるのであって、これがわれわれ自身の思想を豊かにしてゆく[25]

1.「名前は対象の本質であって、対象の色や形とおなじ資格で、対象自体に宿っている」[26]

> なぜ赤が努力や暴力を意味し、緑が休息と平和を意味するのかを自問してはならない。学びなおさなければならないのは、われわれの身体がそれらの色を生きているとおりに、すなわち平和または暴力の凝結物として、それらの色を生きることである。[27]

第三章で子どもたちが突然に色に注意をし、色の命名をする時が来ることを述べた。しかし、それはなにも色や物の名前を知ることが大事であると言っているのではない。メルロ＝ポンティがここで述べているように、私たちの身体が色を生きることそのことが大事なのである。この章では、抽象化された名前や言葉を覚えることよりも、その名前や言葉が生活の中で身体を通して生きられていることが大事でないかということを考えたい。

2.「だっこでえほんの会」の子どもたちの変化

幼い子どもたちと絵本を読む会を開始したのは 2001 年だった。2001 年は、日本で子ども読書年と制定され、東京の上野に国際子どもの図書館が設けられた。また子どもの読書推進協議会のメンバーたちが、イギリスを訪れ、イギリスでは 1992 年に開始したブックスタート[28]という読書活動に共鳴し、このブックスタートの活動を日本でスタートさせたのが 2001 年だった。私自身、自分の子どもたち 3 人と、後には 6 人の孫たちと絵本を読んできたことを考慮して、文庫でも幼い子どもたちと絵本を読むという活動を開始した。

1990 年代くらいから、図書館や文庫を訪れる子どもたちの年齢は低年齢化を続け、あかちゃんの層が増加しつつあった。それまでは、「絵本を読んでもらう」あるいは「おはなし（ストーリーテリング）を楽しむ」ターゲットとしては、3 歳以上と考えられていて、あかちゃんたちは、おにいちゃんやおねえちゃんの付録と目されてきた。それが、ブック

スタートの影響もあって、あかちゃんたちが、突然に、図書館や文庫の大事なターゲットとなったのが、2001 年であった。

日本におけるブックスタートの開始はそれなりに評価できるが、残念なことに、ブックスタート・プロジェクトであかちゃんが絵本をもらっても、その後の読書の流れに繋がっていない。例えば、図書館を利用するとか、本を購入するなどして、本を読むと言う行為が継続化していっていない。それどころか、携帯から始まってスマホなどの普及による、いわばデジタル産業の影響は大きく、家庭での生活文化は破綻しつつある。絵本の読み聞かせも減少しているという印象を持っている。

こうした中で、「だっこでえほんの会」にやってくる子どもたちに変化が見え始めたのは、この数年のような気がする。一冊の絵本に絞って、子どもたちの絵本との関係で見られる変化を考えてみる。取り上げるのは、『りんご』という絵本である。

「だっこでえほんの会」でよく子どもたちと読む絵本の一冊が『りんご』である。あか、きいろ、ぴんくのりんごが一つずつたっぷりと大きく美しく登場して来る。そのりんごの皮がむかれ、食べやすく切られて、「りんごいっぱい」と大きな皿に盛られる。この場面に来ると、まず一人の子が絵本の前にやってきて、絵本の絵から一切れ手で取って食べる。すると、子どもたちは次々にやってきて、一切れずつ食べる。子どもたちの中には、前に出てこない子もいるので、絵本を持って近くに寄り、「食べる？」とたずねると、声には出さず、コクンと頭を前に軽く倒す。まだもじもじしているので、「ひとつどうぞ」と言って、幼い両手をおわんの形に合わせているくぼみに一切れのりんごを入れてあげる。その子は、掌のなかのりんごを、本当にりんごを持っているように大事に持ち、見つめている。その姿は、本当にりんごを持っているとしか見えない。2 歳の子どもたちにとって、絵本の中のりんごは、紙に描いた絵ではなく、絵本の中の文脈の中で、美しくもあり、いい匂いもし、おかあさんがむいてくれたおいしいりんごなのである。りんごである振りをしてくれているのではない。

3 歳半を越したころ、子どもたちは、そのりんごは紙に描かれたりんごだときっぱりとわかるが、想像の世界で遊べるようになる。言葉を、生活の中ではもちろんのこと、絵本の世界でも、幼児期前半に、一つの体験として獲得していく。

ところが、この数年、変化が起こっている。言葉の獲得の問題である。絵本の『りんご』を読んだとする。もちろん、「りんごいっぱい」で一切れのりんごを取りに来る子どもたちはいる。その一方で、りんごの絵が出た途端、「アポー (apple)」という子どもたちも登

場するようになった。りんごを英語で発声して、その子はおかあさんの方を見る。するとおかあさんがにっこりとうれしそうに微笑む。その子もうれしそうにして、おかあさんの方に駆け寄る。りんごを英語で言えて悪いことではない。問題は、その子はもう絵本の世界には入らないということ。一冊の絵本の世界に入り、そこに住み込まないで、英語でりんごと言えたことで満足して終りとなる。その子にとって一番身近にいて、大好きな人が、絵本の世界に入るよりも、一つの言葉、というよりも一つの単語を覚えた方が喜ぶ姿を見れば、幼児はそのことのほうを重視するようになる。

岡本夏木が『幼児期』の中で、子どもたちが、幼児期が空洞化のままでおとな社会に投げ出されていくことの危機感を書いたのは 2005 年のことだった[29]。空洞化たらしめていることの要因の一つは言葉の獲得にある。それから 10 年以上を経過し、幼児期の空洞化は、人間の空洞化に繋がるのではないかと危機感がつのる。

3.「すべての言語が自分で自分を教え示すのであり、みずからその意味を聴者の心のなかに運び込むのである」[30]

『知覚の現象学』の中で、「初めて語を発した幼児」というようなフレーズが数回出て来る。

> はじめて語を発した幼児とか、はじめて自分の気持ちを発見した恋する人とかの言葉、「語りはじめた最初の人間」の言葉、伝統となる手前の始元的な経験を自覚めさせた作家や哲学者の言葉。[31]

> やっと話すことを覚えた子どもとか、はじめて何事かを語り、考える作家とか、また最後に、或る一つの沈黙を言葉に変えようとするすべての人々とか――こうした人々の経験する、表現や意思伝達のなかにある偶然的なものを、われわれはもはや意識しないようになっている。[32]

> 咽喉の収縮、舌と歯のあいだからのヒューという空気の放出、われわれの身体を使う或る種の使い方が、突然一つの比喩的な意味を与えられて、われわれの外部にむかってそういう意味を指示するようになるわけである。このことは、欲情のなかから愛情が浮び出てきたり、人生の初めのとりとめもない運動のなかから〔意味をもった〕所

作が浮び出てきたりすることと同じように、奇跡的なことなのだ。[33]

このような文章を読むと、言葉というものが、人間存在にとってどれほどの美しさや重みを持つかが伝わってくる。幼児の言葉、恋する人の言葉、作家の言葉、哲学者の言葉、さらに人類の言葉、こうした多様な、普通なら並列しないような部類の人たちが並べられ、その最初の言葉が発せられるときのことが書かれている。共通していることは、その最初の意味ある言葉が発せられる前に、「言葉でざわめき立っている沈黙」[34] があったということを忘れてはならない。単なる沈黙ではなく、言葉でざわめき立っている沈黙なのだ。ここで間違っていけないのは、ざわめいている言葉は、現代のように、騒々しくけたたましい機械から発せられ、世界中を覆っている言葉ではなく、素朴ではあるが生き生きとした生活の中の言葉の蓄積であってほしい。

子どもたちには、生活の中で生きている生身の言葉を語ってやりたい。私の場合は、限られた人数の子どもたちではあるが、子どもたちと、言葉も優れ、絵も優れていて、めくっていくことで優れた物語を紡ぎ出していく、そんな絵本を読み続けたいと思う。その絵本が本当に何事かをみずから語るものであれば、自分の聴衆を創り出していくだろうことを信じたい。絵本は、＜言葉と絵と物語＞からなる総合芸術である。優れた絵本は、自ら意味を分泌している。

すべての言語が自分で自分を教え示すのであり、みずからその意味を聴者の心のなかに運び込むのである。はじめのうちは理解されもしなかった音楽なり絵画なりも、もしそれが本当に何事かを語るものならば、ついには自分自身で自分のまわりに自分の聴衆または観衆を創り出す、つまり自分自身で自分の意味を分泌するようになるのだ。[35]

おわりに
—「私の考えと他者の考えとがただ一つの同じ織物を織り上げる」[36]

私は、あらためて、親、あるいはおとなが、子どもを抱いて、絵本を読むことを、いま勧めたい。触覚体験が弱くなっていること、すなわち人にも事物にも直接触れることが避けられることが、現代の危機につながるのではないかと、私は考えている。『知覚の現象学』は、知覚について書かれた本であるが、知覚のなかでも、飛びぬけて視覚が優位に立って

いる。しかし、触覚について触れている個所がある。

> 私が有効に触れることができるのは、現象が私のなかで反響に出会い、それが私の意識の或る本性と合致し、現象に出会う器官がそれと共時化しているという場合を措いてほかない。[37]

視覚は地平を見晴るかすことができる。それに比べると触覚は実に野暮ったい重い感覚で、触っているところしかわからない。ところが、ふわふわの毛布に手が触っていても、からだ全体でふわふわ感を感じることができるのだ。このことを共時化と言っている。

おとうさんが脚を組んで床に座り、そこにわが子を入れて、一緒に絵本を読んであげてみてはどうだろう。ぴったりとくっついて触れ合っているのは、子どもの背中とおとうさんの胸、子どものお尻とおとうさんの脚かもしれない。そして、どちらがどちらに触れていると言うことはできない。触れるということはそういうことなのだ。子どももおとうさんも、全身が触れ合っていると、感じているだろう。

おとうさんが絵本を読み始めると、子どもはお話が面白いからか、絵が面白いからか、おとうさんのあごのひげがちくちくするからか、くっくっくっと笑いだす。幼い子どもの柔らかく弾力性のあるからだの振動がおとうさんに伝わる。おとうさんはますます興に乗って、子どもを喜ばせようと声を工夫して読む。もちろん、おとうさんが文字の読み手ではあるが、おとうさんは聴衆である子どものからだの暖かさ、揺れ、自分の読み方がわが子に与えている影響を感じながら読む。これはまさしく、メルロ＝ポンティの言う、「対話」であり、「共同作業」である。そして、二人で「一枚の織物を織り上げている」のだ。さらにこうも言える。「われわれは同じ一つの世界をとおして共存しているのである。」[38]

この子どもは、おとうさんと読んだ絵本と、おとうさんの声、おとうさんの身振りを忘れることはないだろう。記憶では思い出せなくても、からだは忘れることはない。

メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』を読んできた。現象学はもう古いという声を聴いたことがある。確かに、70 年以上も前に書かれているし、時代の状況は変化している。しかし、メルロ＝ポンティが『知覚の現象学』を執筆したのは第二次大戦中であった。あの時代によくぞこれだけの内容と文体の大著が書けたものだと思う。考えようによっては、だから書けた、あるいは書いたのかもしれない。平静を保って思索し、淡々と書いているように見えるが、大きな悲しみや苦悩があったのではないか。

私には、『知覚の現象学』は希望の書に読める。彼は、人間存在のそもそもの誕生時点に自分を「引き受ける」ことを書いている。『知覚の現象学』の最後の方で、まるで自分に言い聞かすように、メルロ＝ポンティはまた「引き受け」について書く。

> 私の時間を生きることによってこそ、私は他の時間をも理解しうるのであり、現在のうちに、そして世界のうちに埋没し、わたしがたまたまそれであるところのものを決然と引き受け、私の意思するものを意思し、私がなすことをなすことによってこそ、私はその向うに進むこともできるのだ。[39]

幼児たちに伝えたいのは、幼児期である今の時間を幼児期の子どもとして、十分に生きてほしいということだ。そうすれば、自分をひき受けられるようになるかもしれない。

幼児期は、幼児期のままで閉じるものではない。幼児期は、その後も永久に存在し続ける。成年期にも、老年期にも、幼年期は、常にその人の現在となり、生き続ける。

> われわれが生きてきたところは、われわれにとって永久に存在し続けるものであって、老人は己れの幼年時代と接続しているのだ。産み出されてゆく各現在は、時間のなかにあたかも楔のようにうちこまれ、それぞれ永遠たることを主張している。[40]

参考文献

本稿でなんらかのかたちで言及したもの、および本稿を執筆するにあたって参照したものを挙げる（著者名の五十音順）。便宜上、文献を二項目にわけ、第一次文献として絵本作品をあげ、第二次文献として理論書などをあげる。

第一次文献（絵を描いている人の名前であげる）

鎌田暢子　『りんご』（松野正子文　童心社　1984）

瀬川康男　『いないいないばあ』（松谷みよ子文　童心社　1967 年）

元永定正　『もこ　もこもこ』（谷川俊太郎文　文研出版　1977 年）

第二次文献

石井桃子 『幼なものがたり』（福音館書店　2002 年）

岡本夏木 『子どもとことば』（岩波新書　1982 年）

岡本夏木 『幼児期―子どもは世界をどうつかむか―』（岩波新書　2005 年）

オング、ウオルター J.『声の文化と文字の文化』（桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳　藤原書店　1991 年）

カッツ、ダーヴィット 『触覚の世界　実験現象学の地平』（東山篤規・岩切絹代訳　新曜社　2003 年）

スピッツ、エレン H.『絵本のなかへ』（安達まみ訳　青土社　2001 年）

ドゥーナン、ジェーン 『絵本の絵を読む』（正置友子・灰島かり・川端有子訳　玉川大学出版部　2013 年）

正置友子編著 『保育のなかの絵本』（かもがわ出版　2015 年）

メルロ＝ポンティ、モーリス 『知覚の現象学』I、II （竹内芳郎・小木貞孝・木田元・宮本忠雄訳　みすず書房　1967 年　1974 年）／*Phénomenologie de la Perception*, Gallimard, Paris, 1945.／*Phenomenology of Perception*, translated by Donald A. Landes, Routledge, London and New York, 2012.

メルロ＝ポンティ、モーリス「幼児の対人関係」（滝浦静雄訳　木田元編『メルロ＝ポンティ・コレクション３　幼児の対人関係』みすず書房　2001 年所収）／' The Child' s Relations with Others' , translated by William Cobb, in *The Primacy of Perception*, edited by James M. Edie, Northern University Press, USA, 1964.

メルロ＝ポンティ、モーリス 『意識と言語の獲得　ソルボンヌ講義 1』木田元・鯨岡峻訳　みすず書房　1993 年／*Consciousness and the Acquisition of Language*, translated by Hugh J. Silverman, Northern University Press, Evanston, Illinois, 1973

注

1. 『知覚の現象学』I-4
2. ほとんどの人は、幼少期（0 歳～ 3 歳）の記憶を持たない。中には、1 歳のころとか 2 歳のころの記憶を語る人もいるが、それはその後両親などから聞かされて記憶として定着している場合が多い。しかし中には例外もあり、この頃の出来事をかなり鮮明に思い出として記憶している人もいる。後年文学者として名を遺す人にこの例が見られる。例えば、石井桃子の『幼なものがたり』（福音館書店　2002 年）などが挙げられる。メルロ＝ポンティは、幼少時の記憶作用の欠損について、「身体の具え

ている時間的構造をあらわしているにすぎない」(『知覚の現象学』I-236)としている。過去の諸位置を現在の位置に支えられて再把握するためであるが、私は、後年における「誕生から3年ほどの記憶の忘却」は、他の記憶作用の欠損とは質を異にするものではないかと考えている。

3. 『知覚の現象学』I-1
4. 『知覚の現象学』では、「子ども」(幼児、幼児期等々も入れて)の表記を数えてみたところ、70回ほどもあった。この多さには、日本語独特の言い回し、すなわち、代名詞(彼/彼女など)をあまり使用しないということもあり、仏語版や英語訳では、これほど多くはない。
5. 『知覚の現象学』I-274
6. 『知覚の現象学』II-302　なお、引用した訳語・訳文は、他との関連により、邦訳より変えさせていただいた部分もある。邦訳書を十分に読み活用させていただいた。篤く感謝しお礼を申し上げたい。
7. この論考で使われる「主体」という語は、意志的な判断に基づいて行動する人という意味ではなく、一個の身体を持っている人の意味である。
8. あかちゃんの誕生により、個人名が消えて、「おとうさん」や「おかあさん」になるという呼び名の変更は、日本社会の中では、個人の存在よりも社会的な存在(肩書)の方が重要視される、あるいは便利にされるという側面と、家族における一番幼いものを中心にして呼び名が慣行されている、という側面を現わしている。いずれにしても、日本社会は、個人よりも関係性で成り立っていることを示している。
9. 『知覚の現象学』II-235
10. 『知覚の現象学』II-224
11. 『知覚の現象学』II-228
12. エコロジー(生態学)は、生きものと環境の相互作用を研究する学問であるが、現象学は、自然的世界そのものである身体と常に交流している(外の)自然との相互作用を研究するヒントを与えてくれるだろう。
13. 『知覚の現象学』II-301
14. 『知覚の現象学』I-274
15. 『知覚の現象学』II-208
16. 『知覚の現象学』II-228
17. 青山台文庫は1973年に大阪の千里ニュータウンで開設された。文庫は私設の図書室であり、地域の子どもたちと本を結ぶ活動をしている。無償のボランティア活動である。日本の図書館行政の貧しさもあり、1970年代、1980年代は日本列島に5000か所以上存在した。BUNKOとアルファベット化し、

世界の子どもの本の関係者からは注目された活動である。

18. 「だっこでえほんの会」は、青山台文庫主催の活動の一つ。4 月段階の年齢により、0 歳組、1 歳組、2 歳組があり、およそ隔週に、子どもたちは母親と共にやってくる。

19. 子どもたちと接する仕事をしている人たちのなかには、おとなである自分のほうが、子どもたちよりも感性が豊かであると思い込んでいる人が案外多い。成長発達心理学の弊害であろう。人間は右肩上がりで成長すると思い込んでいれば、年齢を重ねればどんどん成長するはずであるが、現実は全くそうではない。

20. 『保育のなかの絵本』（正置友子）を参照していただきたい。

21. 『知覚の現象学』II-165

22. 『知覚の現象学』I-69 参照

23. 『知覚の現象学』I-69

24. 『知覚の現象学』I-70

25. 『知覚の現象学』I-294

26. 『知覚の現象学』I-292

27. 『知覚の現象学』II-14-15

28. ブックスタートはイギリスで 1992 年にナショナル・ブック・トラストの中の一部門であるヤングブック・トラストが開始したあかちゃんとその両親向けの絵本プログラムである。イギリスでは移民の増加があり、適切な英語の読み書きができない層が増えたこと、子どもと絵本をシェアする楽しさを知らない層が増えたことを背景に、プログラムが開始された。プログラム継続の中で経済的な危機に直面したこともあったが、出版社や市民の協力を得て、今では全国的にブックスタート・プロジェクトを展開している。大抵、3 か月か 4 か月の乳児健診時に、保健師と図書館員が協力して、両親に、あかちゃんの心身の健康の大切さを伝え、家族に絵本をプレゼントし、親子で絵本を楽しむように促してきた。スタートしてから 5 年後にバーミンガム大学の研究者が、ブックスタートの恩恵に与った家族の子どもたちと、与らなかった家族の子どもたちを比較研究した。折から小学校に上がっていた子どもたちが比較されたわけだが、赤ちゃんの時に絵本をもらった家族はその後、図書館の利用者になったり、家庭でも本を購入するようになり、要するに親子で本に親しむようになった。そのような影響もあり、ブックスタートに与った子どもたちの方が、小学校で国語のみではなく他教科でも高い成績を得た。このデータを含む研究結果が公にされ、社会の関心も高まり、ブックスタートに寄付をする会社も増加した。一方日本では、2001 年に NPO ブックスタートが立ち上がり、ブックスタートの広報活動、指導に当たっている。今では、日本の市町村数の 60％以上がブックスタート活動を実施

している。ただ、この数字はNPOを通して実施している市町村であり、NPOを通さないでその自治体独自の方法でいわゆるブックスタートを実施しているところもあるので、ブックスタート的なことを行っている市町村数はもっと高いだろう。イギリスと日本の大きな違いは、日本の場合は、本代などは自治体が資金提供をしていることであり、実務は図書館員と保健師が協力している自治体もあるが、図書館員だけのところも多く見受けられる。また、日本はイギリスと違い、識字率は高いので、そのことには力点をおかず、もっぱら親（保護者）とあかちゃんのコミュニケーションに重きが置かれている。

29. 『幼児期』（岡本夏木）p.2
30. 『知覚の現象学』I-294
31. 『知覚の現象学』I-295
32. 『知覚の現象学』I-302
33. 『知覚の現象学』I-317
34. 『知覚の現象学』I-301
35. 『知覚の現象学』I-294
36. 『知覚の現象学』II-219
37. 『知覚の現象学』II-166
38. 『知覚の現象学』II-219
39. 『知覚の現象学』II-374
40. 『知覚の現象学』II-280